

## 旧榎法華村における言語と風習の調査について

その他（別言語等） のタイトル	Research in the dialect ant tradition in the former village of Todohokke
著者	島田 武
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	7
ページ	57-62
発行年	2009-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/692">http://hdl.handle.net/10258/692</a>

## 旧榎法華村における言語と風習の調査について

その他（別言語等） のタイトル	Research in the dialect ant tradition in the former village of Todohokke
著者	島田 武
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	7
ページ	57-62
発行年	2009-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/692">http://hdl.handle.net/10258/692</a>

## 旧楸法華村における言語と風習の調査について\*

島田 武

# Research in the Dialect and Tradition in the Former Village of Todohokke

Takeshi SHIMADA

**要旨**：本稿では、2000年から2006年にかけて行われた、旧楸法華村（現在は函館市）での言語と風習に関する聞き取り調査を概観する。本調査で明らかになったのは、戦前の子供達の遊び、働き口、漁や出稼ぎのために樺太、国後島、択捉島だけでなく、遠く北千島まで行っていた様子である。

**キーワード**：楸法華 方言調査 戦前の風習 漁業 出稼ぎ

### 1. はじめに

2000年（平成12年）7月に、楸法華方言使用地域を含む渡島東岸部の方言と風習を調査・記録するための研究チームを発足させた。同年、室蘭工業大学地域共同研究開発センター・プレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成と楸法華村教育委員会の協力を受け、塩谷亨、島田武、寺田昭夫、橋本邦彦の4名による調査が開始された。その背景には、話者の高齢化が進み、継承されてきた方言と風習が、話者とともに消失してしまうという危機意識があった。さらに2004年には函館市への吸収合併が決まっており、その傾向に拍車がかかるという危惧があったからである。

これまで実施された調査の日程、及び方言調査協力者（インフォーマント）は、次の通りである。

第1回 2000年（平成12年）9月12日～14日

玉村栄吾氏（大正15年生まれ、元船大工）

第2回 2000年（平成12年）11月30日～12月2日

玉村栄吾氏、長政スゲ子氏（大正15年生まれ、主婦）

第3回 2001年（平成13年）12月7日～8日

玉村栄吾氏、長政スゲ子氏

第4回 2002年（平成14年）10月17日～19日

玉村栄吾氏

第5回 2004年（平成16年）3月16日～18日

玉村栄吾氏、彦野勇輔氏（70代後半、元漁師）

第6回 2004年（平成16年）11月4日～6日

玉村栄吾氏、彦野勇輔氏

第7回 2005年（平成17年）9月27日～28日

玉村栄吾氏、彦野勇輔氏

第8回 2006年（平成18年）9月14日～16日

玉村栄吾氏、彦野勇輔氏

その後島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨(2001, 2003, 2004)および島田武(2003)において、聞き書きと音声分析を公表している。以下では、これまでに行われた8回の調査の中から、興味深い事例をいくつか取り上げる。

## 2. 戦前の子供達の風習

昭和初期の榎法華村の子供達には、様々な遊びが、それぞれのルールに従って行われていた。今までの調査で出てきた遊びには、以下のようなものがある。

- (1) 旗取り
- (2) 馬乗り
- (3) 竹捲き
- (5) 竹っこ遊び
- (6) ニチゲツボール（剣玉）
- (7) パッチ（メンコ）
- (8) 海遊び（泳ぐ、ガンゼなどを取る）
- (9) 山遊び（ヤマブドウなどを取る）

上の(1)から(5)までは子供達が集団で遊ぶときに行ったゲームである。例として(1)の「旗取り」が述べられている談話を挙げる。

コドモノゴロノアソビツテユエバネ アノー ヤッパリ ヤマサイツテ ハダトリダノ。

子供の頃の遊びっていうとね あのう やっぱり 山へ行って 旗取りですね

コッチノダンタイド コッチノダンタイド ワガレデ ハダトリスルワケダベシ。

こっちの団体と こっちの団体と 分かれて 旗取りをするわけなんですよ

マダ チョンドイノハラアルンダ ミンナシテ ホレ カマモツテツテ シラツヲツクツテサ。

また ちょうどいい野原があるんだ みんなで ほら 鎌を持って行って さらに地をつくってさ

ソイデ チョンドイノハリスアルンダベスイ ソイデ チャントハダタデオグワケセ。

それで ちょうどいい石があるんですよ それでちゃんと旗を立てておくわけです

ソイデ ホレ コツツイトソツツイノホード ノ ツカイシトリイタリキタリシテノ デ コノーホレ。

それで ほら こっちとそっちのほうと の 使いがひとり 行ったり来たりして の で このうほら

ヨグケンカコグンダ ウンダヨーソゴトーセバ ソッチノホーノハダトラレルベシ。  
よく喧嘩をするんだ そうなんですよそこを通せば そちらの方の旗を取られるでしょう  
マダ ソッチコッチトーセバ ソッチノハダトラレルベシ ノ。  
また そちらこちらを通せば そちらの旗を取られるでしょう の

(島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨 2001)

### 3. 戦前の働き口について

2 節で見た遊びをしていた子供達も、成長して労働の担い手となり、いろいろな職業に就くことになった。インタビューに応じて下さった玉村氏は船大工に、彦野氏は漁師になり、長政氏は出稼ぎにでることになったのである。榎法華は最盛期でも 4000 人ほどの人口しか無く、村内で職を見つけるのは難しかったようだ。現在でも、中学を卒業すると、榎法華の外に出ることが多いという。

イヤ ハダラグテユーヨリモハダラグドゴ ネーндаモン。  
いいや働くとか働かないという問題ではなくて働く所がないんだから。  
ハルノカツオホシトカ。オレダラ オボエテルハンイデワネ。  
春の鯉干しとか。 おれたちが 覚えている範囲ではね。  
アレワ マンダ マズ デメントリタイッテ。イマユー アルバイトシタイテ。  
あれは まだ まず 日雇いの仕事をしたがって。今で言う アルバイトをしたいって。  
コトバデユッテモ ソレガ ネーワゲナノサ。ハダラグドゴガ ネーワケナノサ。  
言葉で言っても それがないわけなんだ。働く所がないわけなのさ。  
ケッキョク トシヨリ オヤダジイガカラフトダトカ チィシマアタリサデガセギニイグノ  
結局 年寄りの 親たちが樺太だとか 千島あたりへ出稼ぎに行くの。  
モー ホトンッド ネー。シューセン マンズ シューセンマエマデワホトンッド デガセギダ。  
もう ほとんど ねえ。終戦 終戦前までは ほとんど 出稼ぎだ。  
マー ズィキノモノワ トルンダケド。 コンプトツタリ。サルメジトイッテモ  
まあ 時期のものは 採るんだけどね。昆布を採ったり「さるめじ」と言っても  
ワカンナイケド ワカメトツタリ ネ ミミトツタリ  
わからないけれど わかめを採ったり ね 「みみ」を採ったり。

(島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨 2004)

### 4. 樺太、国後、択捉、北千島への出稼ぎと漁について

第 8 回目の調査の時に、彦野氏から樺太での生活について興味深い話を伺った。いくつかの事実を以下に挙げる。

- (1) 樺太で過ごしたのは 1 年で、ニシンを捕っていた。カズノコの入っているニシンはせいぜい 3 月 10 日～4 月中の 2 ヶ月足らずしかとれなかった。この期間のため

に若者を雇うのに、およそ3月5日～5月10日の期間で、当時30円かかった。親方はその中から5円を帰りの旅費として残して先に25円渡し、漁期が終わって帰るときに、その5円を渡していた。

ニシンを捕る猟場は部落ごとに決まっていたほかの区域では漁ができなかった。そのため「クキシロ」によって海が白くなると、網を縫い、網を差しては、網を上げて、すぐに代わりの網を差すというふうにして、徹夜で漁をした。漁も重労働だったが、漁そのもの以外にも、「コハタキ」という作業が大変だった。ニシンを捕るうちに、網に卵がへばりついて網の目をふさぎ、簡単には持ち上がらないほど重くなる。それを除くために、山で先がカギ状になっている枝と、まっすぐの枝を1本ずつ取ってくる。みんなで一斉にカギ状の棒で網を引っかけて持ち上げ、まっすぐの棒で叩くのである。卵は大変落としくく、一日この作業をしたとしても、長さにして自分の身長ほどの範囲を落とすのが精一杯であった。

カズノコを腹から取り出して出荷できるようにする仕事は女性が行っていた。人数は30～40人。海から上げたニシンは、2～3日倉庫に積んでおく。そうすることによってカズノコが堅くなって取り出しやすくなる。カズノコを取り出す工程は、まず「クビ」と呼ぶえらの付け根を中指と人差し指で逆手につまみ、腹に向かって引っ張ることで腹を割いて取り出す。次に木製の「ハチゴウ」と呼ぶ入れ物に詰めた。これを作るのに、水漏れがしないように作らなければならなかったが、どうしても漏れる場合には、「ヒカワ」という檜の内側の皮を乾燥させ、ほぐして作った細い紐を、隙間に詰めた。

取った後の身は身欠きニシンにするために、まず竹で作ったクシと縄を使って、10匹ずつ束ねて、竿にかけて干した。5日ほど干した後、身欠きにするが、1本取りと2本取りというものがあつた。1本取りは、1匹のニシンの背中側の良いところだけを残したものであり、2本取りというのは半身ずつに分割したものである。

- (2) その季節以外のニシンは「アトニシン」または「アブラニシン」と呼んでいた。2つに割れるジャッキの付いた釜で炊いた後、海岸のむしろの上で干していた。乾くまで1日に3～4回広げ直した。天気が良ければ3～4日で乾いた。ゆでる釜は1人で2つ担当した。乾いたニシンは、むしろに包んで保存していた。縦に二つ折りにしたむしろの縁をかがる針（「クシ」と呼んでいた）は竹で作り、荒縄を使って縫っていた。ニシンを詰めたものを「タテ」と呼び、「今日タテなんぼ詰めた？」というふうに使っていた。タテは1つで25貫目あつた（1貫 = 3.75kgで約93kg）。ニシンが終わった後の6～7月はカラフトマスを取っていた。
- (3) 暮らしていた番屋は、大泊や真岡に至る鉄道のすぐ側にあつた。鉄道の運転士は顔見知りなので、駅が無くても停車して乗降させてくれた。そのお礼としてニシンやカズノコを渡していた。
- (4) カムチャツカ半島の手前まで漁に行った。国後島は天候を見たり、食料や水や焼酎を補給する中継地点だった。捕れるものは、カニ（花咲ガニ、タラバガニ）。サ

ケ、マス。大根の漬け物をえさにしても魚が釣れるほど豊かな漁場だった。

択捉のベツブ（別飛）にはタラの加工場があった。タラは背開きにして、洗った後、塩をして、2日置いた後真水で洗い、竹のすだれの上で乾燥させて、汽船で函館まで運んだ。女性が70人ほど働いていた。タラ漁は、4月10日くらいから7月5日くらいの間。

その後8月になるとマス漁になる。マスが川に遡上してくると、川に入れないうらい、また竿を川に立てても倒れないうらいであったという。マスは海で捕り、腹を割いた後、筋子を取り出し、塩蔵して倉庫に天井まで積み上げた。その後船が来るのを待っているうちに、20とか30というふうに数を決めて箱に詰めた。塩蔵にするほかに、缶詰工場もあった。

択捉まで、船は一ヶ月に一度くらいしか来なかったし、着くまでに何日もかかったので、おかずになるような生ものや野菜は手に入らなかった。その代わりに、そこに住んでいる人に分けてもらったり、山に入ってフキや行者ニンニクを取って食べた。ほかに食べられるものは無かった。フキは塩水の入った一斗樽に立てて詰めて半日くらいおいた後、各自が食べたいときに取りだして食べた。冬が来ていったん引き上げるときも、塩蔵しておいて翌春に取り出して利用した。

2006年の調査では、初めてビデオカメラを用いて聞き取りを行った。その結果、音声だけでは記録できないような、魚をさばく動作が記録できた。また何よりも生き生きと話をしている協力者の映像を残すことも、重要な資料となることが実感できた。今後は映像資料の記録も必須としたい。この資料を用いた詳細な分析を行う予定である。

## 5. 結語

本稿では、旧榎法華村で行った調査によって明らかになった風習と、そこで用いられていた方言について概観した。そこには話者がいなくなれば存在していたことさえも忘れられてしまう生活と言葉が見られた。昔の遊びの話やゲームやインターネットなどの他の娯楽がたくさんある現在ではもう継承できないことは実感できる。また戦前の出稼ぎや漁の話は、話者がいなくなればその細かい事実が完全に失われてしまう貴重なものである。

現代の日本では、榎法華地域も含め、どこで暮らしていたとしても、日本語が用いられることが普通であり、日常生活を送るためには、ほぼ等質な生活文化が営まれているように見える。その原因を探れば、国語教育、生活の欧米化、高度経済成長期以降の人口の移動と定着、マスメディアによる共通語と情報の拡散などが考えられる。その一方で、現在でも各地を訪れると、その地方固有の方言と風習に触れることも可能である。この二重構造は、日本に生まれたものにとっては、現在のところ当たり前前の存在であり、これからもずっと続いていくように感じられる。

しかし、この二重構造の中で失われつつあるのが、方言とそれを用いて伝えられてき

た風習である。全国共通の生活様式が浸透してくると、かつて普通に行われていたその土地固有の生活様式の中に途絶えるものが出てくる。するとその生活様式とともに受け継がれていた固有の語彙が使われなくなる。そして次の世代に言葉が受け継がれていくときに、その語彙がその方言固有の語彙から共通語の語彙へと置き換わっていく<sup>1</sup>。その結果、本来固有の語彙で継承されていた風習自体も完全に失われてしまうのである<sup>2</sup>。

この変化は不可避のものであり、現在の生活様式が続くと、ますます固有の方言と風習は失われていくだろう。そのようにして我々の生活は変化し続けてきたし、その中から新しい風習や言葉が生まれてくるものだからである。しかし、失われつつある方言と風習を貴重であると感じられる限り、調査を行う価値があると思われる。

### 謝辞

\* この調査に協力して下さった玉村栄吾氏、長政スゲ子氏、彦野勇輔氏には調査協力者として長時間のインタビューを快諾して下さったのを始めとして限りない協力を賜りました。また当時の榎法華村教育委員会の大津氏、佐々木氏、川口氏に、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

### 注

<sup>1</sup> 一例として、徳島方言話者である筆者の経験をあげると、親の世代が使っている「ケンド」という語を使わず、「フルイ」（篩）という共通語の語のみを用いる。日常生活で「ケンド」を使う場面が消失したために、この語を習得せず、学校教育やマスメディアを通じて「フルイ」を習得したものと思われる。類似例として「ユウ」と「ユズ」（柚）、「アイー」と「アユー」（鮎）などがあり、本来の音形が共通語のものに置き換わっている。

<sup>2</sup> 筆者の例を挙げると、「ハツル」という語がある。この語は広辞苑には「少しずつ取り取る。皮などを剥ぐ」という語義があげてある。親の世代でも、ほぼ同じ意味で、丸太から材木を切り出すときに使われていたようであるが、そのような風習も日常生活からなくなり、筆者にとっては既に使用語ではない。

### 参考文献

島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨「榎法華（とどほっけ）における言語と風習-失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第 51 号、pp. 173-182、(2001)

島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨「榎法華（とどほっけ）における言語と風習-失われゆく伝統(2)」室蘭工業大学紀要第 53 号、pp.87-89、(2003)

島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨「榎法華（とどほっけ）における言語と風習-失われゆく伝統(3)」室蘭工業大学紀要第 54 号、pp.87-89、(2004)

島田 武「榎法華方言の中舌母音について」認知科学研究第 2 号、pp. 61-76、(2003)

### 執筆者紹介

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域（言語科学講座）

Email：shim@mmm.muroran-it.ac.jp